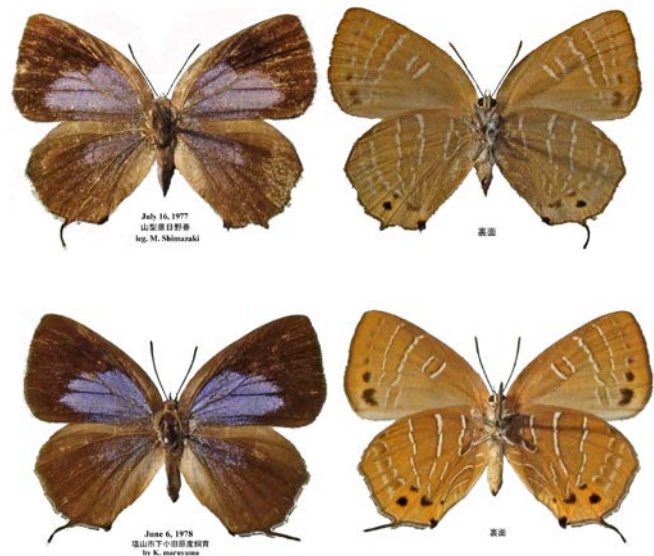


現在、本種の和名はウラミスジシジミに統一されているが、鳥取伯耆大山に因むダイセンシジミという古い呼称を好む愛好家が少なくないようで、筆者もその一人。裏面の白条紋が複雑な模様となる変異個体が知られていて、1964年刊の横山図鑑ではダイセンシジミの正式名称をクボウラミスジシジミとし、斑紋異常型をウラミスジシジミと別分類にして、後者では同じ斑紋を現すのは稀だと記している。2006年刊の白水標準図鑑になると、本種の裏面斑紋には、斑紋変異の多い *signatus* 型：北海道から東北地方北部、および長野に分布と、斑紋が安定している *quercivorus* 型：東北地方南部、関東、長野を除く中部、近畿、中国、九州および国外に分布、の2型があると明記している。

本種との初の出会いは1959年、下諏訪市在住の蝶友から郵送してもらった July 5, 1959、下諏訪大和地区というラベルのつく標本で、長野産ではあるが *quercivorus* 型である。実際に生きた本種を目にできたのは、1977年7月16日、4歳の娘を連れ新宿からの中央線利用で山梨県日野春をオオムラサキ目的で訪れたとき。継ぎ竿の一部を雑木林に置き忘れ、暑い陽射しにさらされないように幼い娘一人を国道20号路傍の木陰で待たせて取りに引き返すというドジをふんだのだが、娘の所へもどった時点で、近くの樹木梢部分を縫うように飛ぶシジミチョウに気づいてネットインしたところ、やや翅に傷のある個体ではあったが、本種の初採集となった。その標本は今でも大切に保管しており、ほとんど色あせない標本を見れば、当時のできごとのすべてが
ありありと思い出せる。蝶愛好家にとって、採集個体のすべてに、すぐに思い出せる多くの記憶がびっしりつまっている。参考のために、翌年、安曇野市在住の友人から飼育羽化個体を提供してもらった美しい標本も示しておこう。



2013年7月14日、ウスイロヒョウモンモドキ観察会のあと転戦した兵庫県村岡町で、思いもかけないタイミングで本種が自然状態で飛び遊ぶ姿を目にできた。それは知る人ぞ知るゼフィルス観察地で、カシワの葉っぱまわりで少し飛んではとまるという挙動を示すシジミチョウの存在を同行の友人がみつけて教えてくれ、実物との出会いは36年ぶりであるにもかかわらず、遠目に



自然状態のビデオ撮影記録をとれたことがうれしい。

に見える裏面の褐色からすぐに本種だと認識できた。雌雄いずれかは分からなく、きれいな翅表のブルーもみられないままだったが、